

# 生徒一人一人に寄り 添い、力を伸ばす

― 仙台育英学園高校での公文式活用 ―



宮城県の仙台育英学園高等学校といえ  
ば、甲子園での目覚ましい活躍が思い出さ  
れる。今年夏の全国高校野球大会では見  
事、準優勝を飾った。同校多賀城校舎の見  
学に仙台駅から仙石線に乗り換えJR中野  
栄駅で降りると、駅前商店街には「おめで  
とう」の文字が躍っていた。コミュニテイ  
ー挙げて、同校を熱く応援していることが  
伝わってくる。

校舎は、駅から歩いて5分ほどの距離。  
ゆったり広がる敷地内には緑の木々が立ち  
並び、赤みがかかったレンガ色の建物が英国  
風で格式高い。すれ違う生徒がそろって  
「こんにちは」と声を掛けてくれるのもさ  
わやかだ。

同校は1905（明治38）年の創立で、  
今年110周年を迎える。約7万人の卒業  
生が多様な分野で注目を集める名門校だ  
が、多賀城校舎ともう一つ宮城野校舎があ  
る。こちらは同じ仙石線でJR宮城野原駅  
下車。多賀城校舎には、外国語、英進進学  
フレックス、技能開発と四つのコースが用  
意されている。宮城野校舎には、特別進学、  
情報科学の二つだ。それぞれに特徴を持た  
せたコースを編成して、3000人ほどの  
生徒たちの多様な才能と希望に対応してい  
る。

## プリント学習で英語が好きになる

英進進学コースでは、1年生が公文式学

習の英語を履修する。2・3年生は選択制  
で英語と国語を学ぶ。合計、英語は約35  
0名、国語は約100名が公文式学習に取り  
組んでいる。さっそく英語科の笠原千尋  
先生の公文式学習の授業を見学させていた  
だいた。

1年生40名ほどが公文式のプリントに取  
り組んでいる。一人一人にピタリと合った  
教材からスタートするため無理がなく、生  
徒は意欲的だ。プリントを仕上げると手を  
あげて先生に机まで来てもらい、英語を音  
読する。ある女子生徒は、50分の授業の間  
に3回も手をあげ、笠原先生を招いて読み  
上げた。わかりやすいきれいな発音だっ  
た。先生は彼女が読み終えると笑顔にな  
り、大きく赤く「Great!」とプリントに記  
した。生徒はにつこりして、さらに次のプ  
リントへと挑戦する。数人が同時に挙手す  
ることも少なくなく、先生は教室内を忙し  
く行き来した。先生は、「生徒がわからない  
と訴えるときは、すぐに答えを教えるので  
はなく、前のページや例題を見たりして、  
自分で考えて答えを導き出すように指導し

ます」と話した。

英進進学コースでは、公文式学習で英語が好きになり、大学で英文科を選んだ生徒がいる。また同コースでは英語検定の準2級に合格した生徒も出るなど、英語への自信が将来の夢と結び付き大きく羽ばたいたケースが目立つ。

### コツコツと自分のペースで前に進む

長く公文式学習を担当する門脇明子先生は、公文式学習は個人に寄り添って進められるのが良い、と話す。100点を取った生徒に頑張りを褒めると、またコツコツと前に進んでいく姿が見られるそうだ。「生徒たちが音読のために次々と手をあげるときは、もう間に合わないくらい。これは、うれしいことです。1人1本ずつEペンシル（公文式学習専用リスニング機器）を持っていきますが、それを聞きながら学ぶので発音が本物です。あれはマジックですね」と笑った。

同コースの教頭、遠藤和秀先生は、「1年生の公文式学習は、生徒の英語力を一定レ

ベルに引き上げることが目標にしています。スモールステップで着実に進む公文式が合う生徒が多く、これからも続けたい。生徒の苦手意識が消え前向きに取り組みうようになるのに、公文式は貢献しています」と話した。

1年生の伊藤茉莉さんは、今春から公文式学習の英語を学ぶ。「公文式は自分のペースで進められるのが良いです。中学のときは過去分詞がよくわからなくて、英語は苦手でした。でも公文式のおかげで理解できるところになりました。今では面白く感じられます」と目を輝かせる。

同じく1年生の小野龍我（りょうが）君は、中学で習った英語で忘れかけていたところがあったが、公文式を学ぶことで再確認できたと話す。先日は、高校の英語の授業で公文式で勉強したところが出たのでよく理解でき、うれしかったと顔をほころばせた。「英語は好きな科目なので、公文の英語は楽しくてなりません。これからも着実に進んでいきたいです。将来、英語を自由

に使えたらカッコいいと思う」と笑った。

「公文スタツフ」の皆さんにもお会いすることができた。月曜から金曜まで午前10時から5時間ほど、5人ほどで採点に取り組み。その中の1人、小幡由美さんはこの校舎で6年ほど続けている。高校2年生の国語のプリントに目を落としながら話す。

「一生懸命に書いた答えを頭から否定することはありません。まず認めて、それから正解に導くアドバイスをするようにしています」

英語の採点に忙しい渡辺千佳さんご自分のお子さんは高校を卒業したが、採点スタツフとして働き続ける。「文法がかなり難しくなるせいか、つまりきが増えるのはI教材です。いつでも本人の頑張る気持ちをそのまま受け止め、丁寧な助言を心がけています」と話した。

仙台育英学園は、規模の大きさやダイナミックな躍動感が魅力だ。一方で、生徒一人一人の力を伸ばす細やかな対応にあふれる。さらなる飛躍はすでに約束されているに違いない。（取材・文／多賀幹子）